

半沢幹一教授定年退職記念 特別企画 誌上文芸サロン①

最後の一文で読む「羅生門」

深津 謙一郎

はじめに——特別企画の趣旨説明

『文學藝術』ご担当の先生から、半沢先生のご退職にあたり、『文學藝術』でも特別企画を組みたいが何かアイディアはないか、というご相談を受けた。『文學藝術』の面白さは毎号の「特集」にあり、共通テーマのもと、専門の違う教員が「腕を競い合う」ところに魅力がある（と私は考えている）。従来、『文學藝術』は特集テーマを告知し、投稿を呼びかけるだけだったが、今から六七年前、特集テーマのもと、話題提供者と参加者がそれぞれの専門に引き付けて侃侃諤諤する場（サロン）が設けられたのは、半沢先生のご発案によるものだった。そこで今回の特別企画では、阿部先生、遠藤先生のご賛同も得て、そうしたサロンの雰囲気や誌上でも再現したいと考えた。具体的には、歌謡、小説、戯曲・脚本と多岐にわたる半沢先生のお仕事に対し、我々三人がそれぞれの専門に引き付け応答していくが、（もしよろしければ）読者諸氏の感想（応答）もぜひお願いしたい（……と申し上げるまでもなく、さつそく半沢先生からリプライを頂戴したそうだが）。この特別企画が、『文學藝術』にお力添えくださった半沢先生に対する我々なりのはなむけになれば幸いである。

一、「最後の一文」を論じること

『吾輩は猫である』の最初の一文は知っていても、最後の一文を知っている人は少ない。半沢幹一によれば、文章構造に関する学問分野でも、最初の一文に関する研究はそれなりにあるのに対して、最後の一文に焦点を当てた研究はほとんどない。最後の一文は、文章全体を視野に入れなければその位置づけが難しいため、それ自体では論じにくいというのだ。それにもかかわらず（あるいは、だからこそ）半沢は、①最後の一文それ自体、②最初の一文との照応関係、③タイトルとの照応関係という三つの切り口に絞ったうえで、近現代文学を中心とした短編計五〇作品の最後の一文を論じようとする。

その成果をまとめたものが、『最後の一文』（笠間書院、二〇一九年九月）である。これは厳密な意味での研究書というより、むしろ一般向けの教養書というのに近く、冒頭（はじめに）にも、「ややもすれば定説として読み方が固定してしまっている作品」の「違った読み方」を示すことが狙いであると記されている。

二、国語教科書への挑発？

「羅生門」の最後の一文は、初出の一九一五年『帝国文学』版では、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」であり、現在知られる「下人の行方は、誰も知らない。」は、一九一八年の短編集『鼻』（春陽堂）収録の際に改稿されたものである。半沢は、この改稿によって、「下人のその後については読者の想像に任され」、「このほうが、作品としての含みや余韻があると見ることもできる」としながら、いっぽうで「誰も知らない」という表現は、最後の最後になって、どこか下人を突き放してしまった感じがする」と指摘する。そして「芥川はたぶん、教科書で問題にするような「生きるための悪」という人間のエゴイズム」そのものを描こうとしたのではなく、それを相対化、つまり一概に悪いとは決めつけられない形にしようとしたのではないか」と主張する。

半沢によれば、ここでいう相対化には二つの意味があり、一つ目は、この後の彼の人生がどう転ぶかは、「当人のエゴイズム云々というよりも、運次第」であるということ。二つ目は、物語の中心は羅生門に留まっていた下人がそこから立ち去るまでの経緯であって、「それ以前およびそれ以後」の彼については「いっさい関知しない」ということなのだという。要するに、人間の行動は、「エゴイズム」のような一貫した論理によって支配されているわけではなく、偶然に支配されている。であれば、国語の教科書にあるような「下人の行方（その後）を話し合おう」という問いもナンセンスではないか、ということであろう。国語の時間に「羅生門」に触れた一般読者への「挑発」として、半沢の読みが有効であることは否定しない。とはいえ、これで終わってしまったては特別企画の意味をなさないので、私も語りと視点という切り口から、半沢の「挑発」に応答してみたい。

三、未熟な下人を相対化し続ける語り

「羅生門」は、数日前に失職した下人が、荒廃した羅生門の下で、生きるための悪は許されるかという問いをめぐって逡巡する場面から始まる。ところが「作者」を名乗る語り手は、思案する下人に焦点化するいっぽうで、三人称のいわゆる神の視点から、下人自身が気付かない彼の未熟さを読者に対して印象付ける。その一例が、羅生門の楼上で、死人の髪の毛を抜く老婆の姿を見た時の下人の反応である。彼はこれを「許すべからざる悪」ととらえ、「悪を憎む心」が「勢いよく燃え上」るが、語り手によれば、下人はこの時、先ほどまで彼の心をとらえていた、生きるための悪は許されるかという問いすら忘れていた。

ここから窺えるのは、下人の逡巡は所詮その程度のものである、ということであろう。いくら都が荒廃したとは言え、蛇を干魚と偽って売った女や、羅生門の楼上で下人が出会った老婆のような社会的弱者でも、なんとか金を得て暮らしていける程度の経済活動は行われているのである。年が若く体力もある（太刀まで所持している）下人が、金

を得るための思案もせず、「生きるための悪は許されるか」と逡巡すること自体、現実的——地に足が付いた行為とは言えない。

こうした下人の未熟さは、老婆が話す死人の髪の毛を抜く理由を聞いた彼の反応にもよく表れている。彼が「許すべからざる悪」と捉えた老婆の行動は、実際には、生きるための悪だからやむを得ないというきわめて現実的な理由に基づいていたのだが、下人はこの「老婆の答が存外、平凡なのに失望」する。下人が期待していたのは、おそらく、今の現実を忘れさせてくれるような非現実（冒険）であり、巨悪に加担するにせよそれを成敗するにせよ、冒険にコミットすることであった。現実には追い込まれ、切羽詰まった状況の中で、生きるために悪を働かざるを得ない老婆とは対照的に、下人には彼を取り巻く現実を軽蔑するだけの余裕がある。

その意味で、もういちど確認すれば、物語の冒頭で下人が生きるための悪は許されるかという問いをめぐって逡巡していた目的は、じつは逡巡することそれ自体、もう少し言えば、哲学的な命題をめぐって逡巡する自分に酔うことだったのではないか。「羅生門」は『今昔物語』巻二十九の説話を下敷きになっているが、京の都に盗みを働くためにやってきた盗人が、そこにあるものすべてを持ち去る『今昔』説話の結末とは異なり、老婆の着物（だけ）しか剥ぎ取らない下人の行為は、生きるために悪を働かざるを得ないという現実的な命題を拒否する泥棒ごっこに過ぎない。

四、本当に、下人の行方は誰も知らないか？

以上をふまえて、「羅生門」の最後の一文である。下人はこのあと、若さと体力に任せて現実を軽蔑したまま生き通せるのか、それとも現実から手痛いしつべ返しを食らうのか。未熟な下人を相対化し続ける語りのありようをふまえるなら、答えは自ずから決まっているだろう。下人の運命を決定するのは「運」ではなく、彼のキャラクターであり、あえて明示せずとも、語り手は（そして、語りの仕掛けを読み取った読者もまた）その行き着く先を知っている

のである。

なお、「最後の一文」シリーズは、その後、『向田邦子の末尾文トランプ』（新典社新書、二〇二〇年）、『藤沢周平とどめの一文』（同）、『枕草子決めの一文』（同、二〇二二年）と続いている。「最後の一文」研究の開拓者が次にターゲットとするのは何だろうか。——「誰も知らない」と言いたいところだが、今度はぜひ、『村上春樹締めの一文』を読んでみたい。